説教20200510　申命記４：３２－４０  ヨハネ１４：１５－２１　209　67　333

「主がとこしえに与えられる土地で長く生きる」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　本日読まれました、旧約新約の聖書箇所にはどちらも、わたしの掟を守りなさい、ということと、これから私たちに与えられる**場**のことが記されています。主イエスの口は同じことを言っておられるのですが、旧約と新約とではその語り口が違います。旧約では火の中から,とか、エジプトから、とか、目に見える事象、事柄を通して主なる神の導きを語っているのに対し、新約では、別の弁護者、とか世は私をみなくなるとか、一見抽象的な表現で、主なる神の導きを語っています。

　私たちがそのように思うのは、旧約の方が、**今日この時**のことを、語っており、対して新約の方は、**かの日**のことを語っているからだと思います。**今日**という言葉は、申命記4章40節に、そして**かの日**という言葉はヨハネ福音書14章20節に出てきます。本日の説教では、この**かの日**と**今日**ということを中心に解き明かしをしてまいりたいと思います。

　本日の聖書箇所に入る前に、いつも週報に掲げております、別府不老町教会の今年度年間目標について解き明かしをいたします。私はこの年間聖句について解き明かしする機会が来ることを待ち望んでおりました。そして、今日の聖書箇所、申命記４章40節でとてもよく似た聖句が与えられたのでその箇所も併せて解き明かしをします。

　年間目標「わたしが命じるすべての掟と戒めを守って長く生きる」は申命記６章１から2節までのうちの一部です。その申命記６章1～2節は本日の招きの言葉でした。この招きの言葉は主なる神の御言葉を取り次いだモーセの口によって神の民たちに語られました。ですから「わたしが命じるすべての掟と戒めを守って長く生きる」のわたしとは、モーセのことであると受け止めることもできるでしょう。しかし、私たちは、このわたしを主イエス様が語るものとして受け止めた方がよろしいでしょう。主イエス様は、父と聖霊と共に代々生きている主として、昔からこのように私たちにお命じになっておられるのです。

　さてこの年間目標の最後、長く生きる、という表現ですが、これは間違いではないですが、**長く生かされる**、と受身に取った方がふさわしいと思います。と言いますのは、今の世の中には、長く生きるというキャッチフレーズでの商売や勧誘が行き渡っていて、この年度目標をそのようなことと混同してしまいがちになるからです。「わたしが命じるすべての掟と戒めを守って長く生かされる」、この方が良いと思います。

　又、**長く**という言葉にも計り知れない含蓄があります。私はその含蓄を表現しようとしていろいろとこの聖書箇所を自分で訳してみましたが、うまくいきません。ところが、明治時代の文語訳聖書のなかに、探し求めていた適訳を見出すことが出来たのです。

その文語訳をお読みします。申命記６章1-2節「これすなはち汝らの神ヱホバが、汝らに教へよと命じたまふところの戒めと法のりと掟とにして、汝らがその渡りゆきて得るところの地にて行ふべき者なり。（6:2）これは汝と汝の子および汝の孫をしてその命ながらふる日の間つねに汝の神ヱホバを畏れしめて、我が汝らに命ずるその諸々の法のりと戒めとを守らしめんため、又なんぢの日を永からしめんための者なり」

　今では耳慣れなくなってしまった、この文語訳聖書も終戦後１０年位の間、この別府不老町教会で用いられていたとのことですので、皆さま、この教会に長い方を捕まえて色々聞いて見るのも良いかも知れません。又、この説教原稿を教会ホームページ上に載せますので、文章でも再度読まれるとよいと思います。

　この年度目標の**長い**は、単に時計で計ったような長い時間、短い時間という以上のことを示しています。いわば計り知れなく長いという意味です。そのことを文語訳では、汝の日を長からしめん、と言っているのです。この文語訳はもとのヘブライ語にも非常に忠実に訳されています。

　俳句の季語に「永き日」という語があります。「永き日」は、昼間が冬や秋より４、５時間長い春の一日を表していますが、この言葉が季語として、俳句に入れられますと、その句は何か永遠を感じさせる躍動感にあふれます。

　江戸時代から昭和に至る迄の句を６句、列挙いたします。

　永き日やうれし涙がほろほろと

　永き日をさえずりたらぬひばりかな

　永き日やロバを追いゆく鞭の影

　永き日の奈良は大寺ばかりなり

　永き日や衛門三郎浄瑠璃寺

　永き日ぞ勤めの母に待てる子に

どの句も、数時間の日永の一日が、永遠につながっていくような趣きを醸し出しています。

勿論、永遠ということは、限りがある私たち人間が持つ性質ではなく、主なる神の性質ですので、これらの句では、その主なる神の永遠が垣間見えている、と言いますか、その永遠を擬人化して著しているといえるかも知れません。

　私たちには、今は見えなくされている主なる神が、顕されるように、という思いが与えられています。その**永遠を思う心**は、現代日本語を用いて「長い日」というより、古い日本語、古語を用いて「永き日」という方がはるかに、あふれ出てきます。ちょっと調べてみたのですが、それは古語でいう「永し」が、水の流れの「流れ」と同じ語幹であることによるのだと思います。つまり古語でいう「永し」は、単に計ったように長い短いということだけを表すのではなく、先へ先へとひたすら進み行く水の流れ、「流れ」から来る言葉だったのです。そのことが分かると明治の人が「またなんぢの日を永からしめんための者なり」と訳することが出来た理由も分かってくるかと思います。

　先ほど挙げたうちの俳句の中の４句は明治時代に正岡子規が作ったものです。正岡子規は３５歳というその生涯を、２１歳で発病した結核という疫病との戦いの内に大半を過ごしました。しかし、その生涯の内に、常に句会を開いて、「永き日」から始まる句を５０句程も造り、その一日の永さを味わい楽しんだのでした。その長さは、その日その時にあって永遠の喜びを感じせしめるもの、であったのです。

　ここまでちょっと日本語にこだわりすぎたかもしれませんが、実は宗教改革者カルヴァンもフランス語という母国語にこだわり、それまでラテン語でしか語られてこなかった主イエス様の救いの事柄を、初めて何とかフランス語で宣べ伝えようとして著述を続けた人でした。その結果、フランス語圏の人々はカルヴァンの著作を読み、人々はだんだんとフランス語で主イエス様の救いを語りあうことが出来るようになったのです。

　私たち日本人も、そのように日本語で主イエス様の救いを語り合うことが出来ますよう、その言葉に注意深くこだわっていく必要があると思います。

　では本日の聖書箇所に入ります。

　申命記では、律法がモーセの口を通して語られています。神の民はモーセを先頭にシナイ半島の荒れ野を歩み、シナイ山に歩みを進めます。この山の上でかつてモーセは燃え尽きない柴の間から神の声を聞いたのです。神の民がシナイ山に到着したとき、山は全山ぜんざん煙に包まれ、その煙はロの煙のように立ち昇り、山全体が激しく震えていたのです。民はその有様を見て大いに畏れます。民らはこの時、煙たちこめ激しく震える山の姿を畏れたのでしょうか。それとも主なる神を恐れたのでしょうか。或いは山の姿と主なる神とを同一視してその両方を畏れたのでしょうか。

　私たち人間は自らを畏れさせるものの前にひれ伏し、それに従い、それを拝むようになります。この時民らが置かれていた古代オリエントの世界は、エジプトではエジプトの、カナンではカナンの、バビロンではバビロンの神々が拝まれる多神教の世界でした。シナイ山に到着した民らもこの時、山を拝むという偶像崇拝におちいる恐れがあったです。しかしその時、恐れおののく民らに対し、モーセは　「恐れることはない。神が来られたのは、あなたたちを試すためであり、また、あなたたちの前に神を恐れる恐れをおいて、罪を犯させないようにするためである。」との神の意志を説明するのです。　神の民たちの今日この時は、ここに見出されます。

モーセは本日の聖書箇所で、私たちの主なる神が、その全能の御手をもって私たちの先祖を、奴隷状態にあったエジプトから救い出して、ここまでその救いの道を共に歩んできて来てくださったこと、そして私たちが他の神を拝むことがないように私たちを訓練し、主なる神のみを畏れるようにと、民たちに切々と語ります。

　モーセ自身にとって、初めてシナイ山の上で燃え尽きない柴の間から神の声を聞いたことは、彼にとっての今日この時でした。柴というのは決して火持ちのよい太い木の幹ではなく、枝葉の寄せ集めという意味です。そのはかない柴が燃え尽きないことを見届けようとしたモーセは、その火に手ずから枝葉を追加して、くべようとはしませんでした。そうしてしまうと主なる神の永遠はモーセの手によって分からなくされてしまったことでしょう。その代わりモーセがしたことは履物を脱ぎ、神を見ることを恐れて顔を覆ったことでした。

　今日の旧約聖書箇所の最後、申命記４章４０節「**今日**、わたしが命じる主の掟と戒めを守りなさい。そうすれば、あなたもあなたに続く子孫も幸いを得、あなたの神、主がとこしえに与えられる土地で長く生きる」が、今を生きる私たちにとっての今日この時です。

　今日この時、わたしたちの主なる神は、御自身が命じる主の掟と戒め、それはシナイ山で神の民が聞いた十戒のことですが、それらを守る様にと私たちにお命じになるのです。

そして、その主の掟と戒め、すなわち十戒を、主イエスキリストさまからの御言葉として受け取る時、それらの律法を、私たちは恵みと真理として受け取ることが出来ます。

　ヨハネ福音書１章17節「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」は このようにして今に実現しているのです。

　ヨハネ福音書１４章１５節からを見てみましょう。「あなた方は、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」。ここで愛が語られます。旧約からの続きとして、その愛を語るとしたら、私たちを長く生かされる主なる神の御言葉が、神の愛でなくしてありえるでしょうか。　父と子と聖霊の三位の神は、別の弁護者、これは私たちを満たす聖霊のことですが、その別の弁護者を絶えず私たちのまじかに送っていてくださいます。この聖霊をみよう知ろうとして私たちは絶えず祈っています。それはモーセが柴が燃え尽きないことを見届けようとしていたことに似ています。聖霊は無理に連れてこようとして来るものではなく、私たちは聖霊がやって来られて私たちを満たされることを、ただ待ち望んでいるのです。三位一体の主なる神イエスキリストによってお祈りしていると、私たちは必ず聖霊に満たされ、そのとき、父なる神様は私たちを我が子として下さり、決してみなしごにはしておかれません。

　**かの日**には、私たちクリスチャンは、今は見えなくされている主イエス・キリストを見るようになります。私たちは代々よよに生きている主なる神イエス・キリストに引き寄せられて生きるようになります。

　**かの日**とは**今日この時**に続く日々といっていいでしょう。私たちは今日この時に主なる神の永遠を予感しつつ、また主イエス・キリストの名によって祈りつつ、来るべき**かの日**を待ち望んでゆきたいと願います。

お祈りいたします。

ご在天の私たちの父なる神様、今日は御前に私たち兄弟姉妹を集めて下さり、共に御言葉に聞くことが出来ました幸いに感謝いたします。

　あなたは、すべての人に永遠を思う心をお与えになりました。私たちが今日この時に、その永遠を思い、それがあなたからのものであることを悟らせてください。そして私たちがあなただけを畏れ、生きる者としてくださいますように。

　主よ今、疫病のうちに、困難と困惑に打ちひしがれている方々、病と戦っておられる方々を憐れみ、癒し、支えて下さい。

　この時に、世を去った主にある兄弟姉妹を覚えます。あなたは世を去った者にも、世にある者にも等しく望みを与えて下さいます。どうかパラダイスおよびこの世にある主の全教会をみ光で照らし、天よりの慰めをお与えください。またすべての世を去った人たちを顧みてください。どうか主の深い慈しみのうちに、彼らを守り、主の全きみ旨を成し遂げてくださいますように。

　父と聖霊と共に一体であって、代々生き支配される主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。